

様式 7

論文内容要旨

報告番号	甲 総 第 号	氏 名	吉 岡 一 洋
学位論文題目	社会における地域芸術の役割と振興について —絵師・金蔵とギュンター・グラスの芸術を事例として—		
<p>内容要旨</p> <p>序章では、研究の背景・目的・方法について述べている。筆者は2000年代に入り徳島大学や高知大学において高等教育や生涯教育に携わる中で、地域芸術が生涯教育にも広い意味で接続していることがわかった。そこで本研究の目的として、次に示す3点を挙げる。①社会における地域芸術の現状と問題点を整理する。②絵金とグラスという芸術家を中心に地域芸術の役割、本質を問う。③地域の伝統的な芸術の意義を明らかにし、地域に根付く芸術を残して行くために教育の面から考察する。</p> <p>第1章では地域芸術のこれまでの変遷と現状を検証した。複雑多層化する地域芸術について、筆者が関わってきた創造活動や生涯学習、各種フィールドワーク等の実体験から事例を踏まえて検証し、地域芸術の言葉を定義した。個人や地域にとって芸術に触れる機会の増大は、地域の芸術文化の土壌を耕し、やがて地域から芽吹く芸術家の種を蒔くことにも関係するといえる。さらに生涯学習により地域に芸術が溶け込み地域芸術として収斂することを考究した。</p> <p>第2章では高知県の伝統的な祭礼等にみられる絵金作品について、地域の現状を検証した。絵金作品の維持・保存についての状況は区々であるため、峯八王子宮と郡頭神社での調査を行い検証した。さらに絵金作品を用いた祭礼が持続可能な状況にないことを発端として、高知大学での協働教育の実践について、今後の課題を踏まえて検証した。この他、高知県内での「絵金展」にも触れ、絵金の生涯と高知が育んだ地域芸術としての絵金の価値について検証した。</p> <p>第3章では、グラスの造形芸術に関する検証を行った。その為に「作家論」「技法論」「地域」といったキーワードで捉えることは芸術家グラスの重要な視点となる。ドイツを代表する小説家グラスは、1999年にノーベル文学賞を受賞しており、先行研究は小説家ギュンター・グラスとしての文学研究の側面からのものが多く、芸術家グラスとしての日本国内での調査研究は、1980年代後半を境にして減少する。グラスの造形芸術の検証は文学面での検証と等価であり、造形芸術や版画芸術にいての検証や、グラスの造形芸術を今日の地域芸術へと援用することは新規性と独自性を有している。</p> <p>第4章では、地域芸術をめぐる絵金とグラスを比較文化的な観点から検証を行った。絵金とグラスについて、彼らが生きた時代背景や社会情勢を概観した。彼らは国や時代も異なるが動乱の時代を生き抜き、地域に根ざした芸術家である共通点は本研究の重要な視点として捉えている。また両者とも中央の画壇で評価された芸術家ではなく、むしろ中央の画壇に対してあえて一定の距離をおいていたことで、彼らの地域への視座を本論の考察の核として援用した。</p> <p>終章では、本論で総括してきたことを、大学教育及び地域の芸術文化振興に活用することを今後の展開として述べた。地域の芸術文化の涵養に教育は重要である。少子高齢化による地域の活力が減退する今日において、消滅しつつある地域芸術は放置できる問題ではなく、地域芸術を行政・文化施設・大学などと結びつけることが求められる。地域芸術を捉える視座は、教育の中での美術との触れ合いの中から、多様な感性を育む心や幅広い視野を身につけることができると考える。様々な関連機関との連携・協働が地域の側から内発的に生まれてくることが望まれる。</p>			